

東山連峰西麓の伏見・深草に、日本画家市原義之（1943年）の自宅アトリエがある。この家はもともと、後に師となる下保昭の自宅だった。約40年前、「友人の画家と東福寺の近くで家を探していると、下保先生もその辺に家を建てようとさえていた。友人と知り合いの下保先生は『それなら、俺の家を買え』と。その日のうちにここに連れてこられた」と笑う。北向の画室は「一年を通じて光の加減が変わらず描きやすい」ことで自然の移ろい、土のぬくもりを実直に描く作品を制作

自然の移ろい 真摯に描く

アトリエトーク

日本画家

市原 義之

「兆」 2008年 東田
電機産業株式会社所蔵



し、一昨年の日展で内閣総理大臣賞に輝いた。下保もかつて同

「絵の道具を持たずに歩くと、いつも見過ごしていたものに出会えることがある。その瞬間が楽しい」という市原義之（京都市伏見区）＝撮影・中尾悠希

じ賞を受賞しており、この画室から2人目の輩出となつた。市原は徳島出身。ラグビー少年だったが、東京に試合を見に行つた際、初めて日展を見て庄倒された。体育大に進むつもりが、たまたま受けた金沢市立美術工芸大に合格。縁を信じて絵の道へ。京都教育大特修美術科にも学んだ。修了後、下保との偶然の出会いが転機だつた。下保の周りには、川島睦郎、久保嶺爾、山崎隆夫ら俊英が集まっていた。師は特に何か言うでもなく、若い作家たちはそれぞれに師を感じていたという。

叙情に流れる作品に行き詰まり、30歳前に妻子を残して南米放浪を思い立つた。旅立つ前、下保は「一枚のスケッチより、1日10分でも絵のことを真剣に考えろ。自分にとって絵とは何か、なぜ絵なのか」と諭した。

堂本印象美術館（北区）が第3回京都現代作家展で「自然讃歌」と題して市原を紹介している（8月10日まで）。真摯に自然と向き合った本画と素描計32点を展示中だ。（河村亮）



■ 催し 川村悦子「蓮（れん）×聯（れん）」展
が、ぎやらりい思文閣（京都市東山区古門前通大和大路東入ル）で開催中＝写真。油彩画家川村が掛け軸に挑んだ。書道の半紙をさらに半分にした細長い紙に、川

村らしいしっとりしたタッチで蓮や水面を描き入れた。1幅でも数幅でも自在な間隔で並べられ、軸と軸の間の空気感、想像の広がりを提案する。油彩21点と水彩8点。7月6日まで。無料。

アートスクエア



◇ 日本台湾新世代芸術家交流展が、アーティスロング（三条通堀川西入ル）で開催中＝写真。同画廊が、交流のある台湾のギャラリーと共に催。台

湾作家は古典的絵画をモチーフにしたアニメ映像、キャラクターや商品、標識など多様なイメージを組み合わせた写真作品など。日本側は、カラフルな人型の薄いフェルトを高さ1㍍まで積み上げる服部正志、東日本大震災の漂着物を追いかけた田中健作ら。7月6日まで。月休。無料。